

ソーシャルワークにおける方法、 技法、技能の関連性

日和恭世

【要 旨】

ソーシャルワークにおいて方法 (method) は基本的要素のひとつであるとされるが、「方法」とは何か、近似の概念とはどのような関連性があるのか等は十分に体系化されてこなかった。そこで、本稿では、ソーシャルワークにおける「方法」、「技法」、「技能」の3つの概念に着目し、これらの概念の関連性の考察と体系的な整理を試みた。

【キーワード】

方法、技法、技能、技術、実践の科学化

1. はじめに

ソーシャルワークはこれまで専門職の実践となり得るために不断の努力を続けてきた。それは、アートとしての側面が大きかった個々人の実践をサイエンスとして確立するためのプロセスであり、また、個々のソーシャルワーカーが「ソーシャルワーカーという専門職としてのアイデンティティ」を構築していくためのものであった。

しかし、そのプロセスは、ソーシャルワークが専門職の実践であろうとするために、「方法」のなかでもとりわけ「いかにするか (how to)」ということを過度に重視したものであった。そのため、価値や知識なしには行うことができないはずのソーシャルワークにおいて「方法がひとり歩きする」という事態が生じたのである。その反省から、方法論の統合化についての議論がなされ、クライアントがおかれている状況に合わせて適切に方法を使い分けることに重きがおかれるようになった。これが、近年のソーシャルワーク教育においてジェネラリスト・ソーシャルワーカーの養成が求められている所以である。しかしながら、「方法」について体系的に整理した研究は、それほど多くはないのが現状である。特に、我が国においては、方法に関して「ソーシャルワークの方法・技術」と表記されることもあり、方法と技術の関連も見えにくくなっている。

そこで、本稿では先行研究のレビューにより、ソーシャルワークにおける「方法」とは何かを明らかにするとともに、近似の概念である「技法」や「技能」との関連性を考察し、これらの概念を体系的に整理することを目的とする。

2. ソーシャルワークの基本的要素

全米ソーシャルワーカー協会 (NASW) が1958年に発表した「ソーシャル・ワーク実践の基礎的定義」によると、ソーシャルワーク実践は価値 (value)、目的 (purpose)、サンクション (sanction)、知識 (knowledge)、および方法 (method) という諸要素から構成されるとされる。そして、「これらの諸要素がどのような特有な内容を持ち、そして全体としてどのように配列されるかによって、ソーシャル・ワーク実践が形成され、他の専門職の実践との相違が示されることになる」という (Bartlett = 1978 : 251)。ここでは、方法 (method) のなかの要素として技法 (techniques)、技能 (skills) が位置付けられている。また、ベームはソーシャルワーク実践をひとつのアートと捉え、①直面している専門的課題に適合する知識を自覚的に選択すること、②知識とソーシャルワークの価値を結合すること、③この統合されたものを専門的というにふさわしい活動のなかに具体的に実現していくこと、という3つの過程を通して技能 (skill) が生じると指摘している (Boehm = 1972 : 10)。つまり、ソーシャルワークを形作るのは、価値、知識、技能 (skill) であるということである。ジョンソンらもソーシャルワークを知識 (knowledge)、価値 (value)、技術 (skills) の創造的混合として捉えることの重要性を指摘している (Johnson & Yanca = 2004 : 56 - 57)。シーファーらは価値 (value)、原則 (principle)、技法 (technique) を (Sheafor 1995 : 32 - 36)、佐藤豊道は価値の総体、知識の総体、技能の総体、能力の総体の4つをソーシャルワークの本質的な要素としている。また、奥田はソーシャルワークの重要な要素として価値 (value)、知識 (knowledge)、技能 (skills) をあげ、これらの要素間の関係性について「ソーシャルワークは複合的な知識と諸価値をその技能をとおして実践する専門職業としての活動である」と述べている (奥田1992 : 132)。これらの先行研究から、価値、知識についてはソーシャルワークにおける本質的要素として共通の認識があるものの、もうひとつの要素を何とするか、という点で見解が異なることが分かる。ここでは、「方法」「技能」「技術」「技法」という4つの言葉が用いられているが、これらを注意深く見てみると、いくつかの検討すべき事項が存在している。ひとつは、方法をどのような範囲のものとして捉えるのか、という点である。つまり、ソーシャルワーク実践の基礎的定義のように方法を広義に捉え、その中に技法や技能を含めるのか、それともそれらを別個の独立したものとして捉え、より細かく規定するのか、ということである。ふたつめは、ベームもジョンソンも原文では同じ“skill”という用語を使用しているにもかかわらず、「技能」と「技術」の二通りに訳されており、日本語の文献として読む際には、あたかも別の要素のような錯覚を与えてしまっている点である。つまり、原文では同じ用語が用いられているのに、日本語に訳す際の表現が異なるために、我々日本人にはこれらの要素の違いについての混乱が生じる可能性がある、ということである。

ここで、もう少し日本語における訳語の違いについてみていくことにしたい。まず、“method”であるが、これはほぼすべての文献で「方法」と訳されている。次に、“technique”であるが、これはおおかた「技法」という訳に統一されているようである。問題は、“skill”である。「スキル」とカタカナで表記する場合もみられるが、“skill”に関する先行研究を概観すると、訳語として奥田、平塚らは「技能」を、山辺、太田らは「技術」を用いていることが分かる。また、カウンセリング辞典では「技法」と訳されている。バートレットの著書『ソーシャルワーク実践の共通基盤』において小松源助が“skill”に「技能」の訳をあてたことに端を発し、我が国の先行研究では「技能」と訳されることが多いようであるが、研究者によってそれぞれの意味合いで異なった訳語を用いているのが現状である。その一例として、「技術」という言葉を用い

ている安井は、技術と関連の深い“art”の訳語のひとつに「技術」があることを指摘し、“skill”の訳語としては「技術」の方がふさわしいと述べている（安井2009：36-37）。“skill”の日本語訳として「技能」と「技術」のどちらを採用するか、という点だけでも混乱を与えるのであるが、さらに、“art”の訳語として「技能」を用いている研究者もおり、問題は一層複雑である。このように、ソーシャルワークの本質的要素ひとつをとってみても日本語訳は必ずしも統一されているわけではなく、その内容や意味が混同されている側面も否めない。このことから、我が国におけるソーシャルワーク用語の未整理という状況が複雑で分かりにくいとされるソーシャルワークをより分かりにくくしているといえるであろう。この点は、我が国においてソーシャルワークを専門職の実践として確立させていくためには、避けては通れない重要な検討課題であると考えらる。

本稿では、「技能」、「技法」、「技術」などを日本語で記載する場合は、引用文献の通りに記述することとするが、訳語による概念の混乱を避けるために、可能な限り原文で用いられている英語を併記していくこととする。また、引用以外の部分では、“method”を「方法」、「technique」を「技法」、「skill」を「技能」として整理していく。

3. ソーシャルワークの方法 (method) とは何か

そもそも、方法 (method) とはどのような意味をもつのであろうか。広辞苑によると方法とは「しかた。てだて。目的を達するための手段。またはそのための計画的措置。」とある。また、オックスフォード英英辞典では「何かをするためのやり方」とされている。つまり、語義としては、目的を達成するための手だて、手段であると理解することができる。

では、ソーシャルワークにおいてはどのように用いられているのであろうか。前述した「ソーシャルワーク実践の基礎的定義」によれば、方法 (method) とはきちんと組織だてられた手順の様式であり、ここでいう方法にはケースワーク、グループ・ワーク、コミュニティ・オーガニゼーションが含まれるとされる (Bartlett=1978：253)。また、ビスノーは方法 (method) を「ある専門職、実践、もしくはある範囲にまたがるいくつかの専門職と実践に共通になりうるほど十分に一般化された技術 (technique) のことである」と定義している。さらに彼は、具体的な方法として①対抗的方法、②調停的方法、③開発的方法、④助長的・教育的方法、⑤知識の発達と検証をすすめる方法、⑥回復的方法、⑦統制的方法、⑧規則履行方法、⑨規則作成の方法の9つをあげ、多様なシステムとの効果的な相互作用をするために必要な方法と技術を教育していくことの重要性を述べている (Bisno=1978：203-210)。我が国においても、幾人かの研究者により方法の定義がなされている。小松によれば、方法とは「社会福祉実践を適切・有効に展開していくための手段として発達し体系づけられているもの」であるという (小松1983：5)。岡村は、「社会福祉の方法とは、社会福祉の機能を効果的に発揮するための方法ないし手続きである」と述べ、機能との関連から①評価の方法、②調整の方法、③送致の方法、④開発の方法、⑤保護の方法の5つに整理している (岡村1983：137-141)。また、太田は、ソーシャルワークの方法を「ソーシャルワークの技術の体系として類型化されたもの」として理解することの必要性を指摘している。

ソーシャルワークにおける方法 (method) という場合、伝統的にケースワーク、グループ・ワーク、コミュニティ・オーガニゼーションの3つが主軸となっていたことは周知のとおりである。特にケースワーク、グループワーク、コミュニティ・オーガニゼーションにおいては、クライアントの問題をどのように解決するか、という視点よりもこれらの方法をもって解決できる問

題は何か、という捉え方が主流であった。つまり、方法自体が目的となってしまうのである。そのため、ソーシャルワーカーというよりもむしろ、ケースワーカー、グループ・ワーカー、コミュニティ・オーガニゼーション・ワーカーなどとして自らを位置づけ、それぞれの方法が専門分化していったという経緯がある。このことに関して、ブトゥリムは、バートレットの主張に触れながら、ソーシャルワークにおける方法は「体系的手順 (systematic procedure)」と定義されることが多いが、「価値と知識と技能 (skill) を結合した自己完結的な統合体とみなされてきた」として、価値や知識よりも方法を強調しすぎてきたこと、またそれによる弊害を指摘している (Buyrym=1986:100)。1960年代以降、同様の議論が活発化し、方法の統合化が進み、方法を単一的なものではなく、広範囲で多様な内容をもつものとして捉えるようになった (小松1983:23)。さらに、バートレットは、これまでの方法 (method) という用語に代わって、方法 (method)、技法 (technique)、技能 (skill) を統合した概念として介入 (intervention) という用語を用いるようになった (Bartlett=1978:75-80)。そのため、近年では、ソーシャルワークの文献において方法 (method) よりも介入 (intervention) という用語を目にすることが多くなっている。

このように、方法を単純にケースワーク、グループ・ワーク、コミュニティオーガニゼーション (コミュニティワーク) などと捉えることはなくなったものの、現在においても方法は十分に体系化されているとは言い難い。

他方、我が国においては、方法を①直接援助技術 (ケースワーク、グループワーク)、②間接援助技術 (コミュニティワーク、社会福祉調査法、社会福祉運営管理、社会福祉活動法、社会福祉計画法)、③関連援助技術 (ネットワーク、ケアマネジメント、スーパービジョン、カウンセリング、コンサルテーション) の3つに整理し、理解されてきたという歴史がある。現在では、このように方法を分類せずに、ジェネラリスト・ソーシャルワーカーとしてひとつの統合された方法でもってソーシャルワークを実践していくことが重視されている。しかしながら、方法が何を意味するのか、どこまでを方法として捉えるのか、といった詳細は十分に整理されていないと言えるであろう。その意味で、小松の方法の基本的構成要素に関する研究は我々に方法理解のためのひとつの道筋を与えてくれる。小松は、①その方法を用いる者がどのような立場にたつか、②社会福祉実践にかかわってくる人々とワーカーとの間で結ばれる関係がどうであるか、③方法が具体化される過程の基本的な原則と枠組みの理解、④過程の原則や枠組みが具体的に展開されるための技能 (skill) の習得、という4つを方法の基本的枠組みとしている (小松1983:26-47)。言い換えれば、方法 (method) はソーシャルワークの価値や知識をもとに決定されるものであり、その方法を具体的に展開するには技能 (skill) が必要不可欠であるということである。

以上より、方法については次のようにまとめることができるであろう。すなわち、ソーシャルワークの方法とはあくまでも目的を達成するための手段であり、「どのように目的を達成するか」ということを表すものである。ここで重要な点は、「どのように」とは単なる how toではなく、価値と知識に基づいて導き出されたものであるということである。岡村が指摘するように、方法は、「社会福祉固有の視点とその視点によって体系づけられた社会福祉理論に従属すべきもの」でなければならない (岡村1976:43)。しかしながら、方法に関する研究はまだまだ少なく、十分に体系化されているとは言いがたい状況である。この点は、現在のソーシャルワークが抱える課題のひとつであろう。

4. ソーシャルワークの技法 (technique) とは何か

次に整理しておかねばならないのが、「方法 (method)」と「技法 (technique)」との識別である。久保によれば、ケースワークにおいては1920年代より「処遇」の概念に関して論者によって“art”, “method” “technique”, “skill”, “attitude”などの異なる言葉が用いられていた歴史があるという (久保2004: 4)。つまり、これらの概念、用語の混乱はソーシャルワークにおいて長年横たわっている問題であるということがわかる。同書において久保は、ブラウンの「方法 (method)」と「技術 (technique)」の定義を紹介している。ブラウンによれば、方法 (method) とは「ある目的に達するために組織的な仕方、ケースワークの関係・活動・技法を使用すること」であり、技術 (technique) とは「クライアントに対するケースワーカーの特別な反応」であるという (久保2004: 26)。これは、ケースワークに限定した定義であるが、ケースワークの部分をソーシャルワークに読み替えることも十分可能であろう。また、NASWの「ソーシャルワーク実践の基礎的定義」によれば、「技法 (technique)」とは、方法の一部として用いられる手段であるという (Bartlett = 1978: 251)。一方、奥田は技法について、ゴールドSTEINの「意図する目的遂行のために使われる特別な手段」、ティムズの「特殊な活動目標の達成のための標準的な手法を適用するのに用いられる」との定義を紹介しながら、技法は、「個々の援助活動においてソーシャルワークの方法を具体化する過程で、援助を行う、あるいは援助の効果を高めるために独自に一定の科学的手続きのもとで開発された標準的な手法であり、サービス活動において諸技能を具象化し、手段化した特定の技術を編成し、具体的な介入目標に従って科学的成果を援用して実践される専門的介入方法である」と規定している (奥田1989: 52-53)。さらに、太田は、技法を実践の方法を具体化するためのものであり、価値実現への技術を具体化する行為であると捉えている (太田ら2005: 106-107)。つまり、「技法 (technique)」とは、「目標達成のために用いられる、方法をより具体化した手法である」と捉えることができる。ソーシャルワーカーがソーシャルワークを実践するためには、価値や知識に基づいた方法をとることが必要とされる。それゆえ、その方法を具体化したものである「技法 (technique)」も当然、ソーシャルワークの価値や知識から導き出されたものである、ということになる。

では、具体的にはどのようなものが技法 (technique) としてとりあげられているのであろうか。前述したNASWの「ソーシャルワーク実践の基礎的定義」では、支持 (support)、明確化 (clarification)、情報の提供 (information-giving)、解釈 (interpretation) など16の技法があげられている (Bartlett = 1978: 251)。また、ビスノーは、方法の下位概念として、その方法を実現するための技法 (technique) を紹介している。方法の種類に関係なく技法 (technique) をいくつかあげるとすれば、交渉 (negotiation)、取引 (bargaining)、助言を与える (advice-giving)、成し遂げたことを評価する (Performance evaluation)、情報の提供 (provision of information)、立法運動 (legislative lobbying) など多岐にわたっている (Bisno = 1978: 207-210)。わが国のソーシャルワークの文献を概観すると、「技法」との言葉が用いられているのはコミュニケーション技法、面接技法、記録技法、アセスメント技法、などといった場合である。面接技法は心理や看護など他の分野でも必要とされており、ソーシャルワークに限ったものではないが、ソーシャルワークの技法 (technique) のひとつとして取り上げられている。例えば、岡本は、面接技法を「面接を合目的に円滑に遂行するための方法である」としたうえで、観察 (observation)、傾聴 (listening to interview)、受容 (acceptance)、解釈 (interpretation) を紹介している (岡本1973: 231-247)。また、北川も傾聴、質問、観察の3つの面接技法について解説している (北川2006: 25-46)。ここで注視すべきことは、文献によっては「技法 (スキル)」と記載されてい

るものがあることである。この場合、筆者が“technique”と“skill”をどのように捉えているのか、また、併記することで何を意図しているのかが不明瞭である。もし、筆者が技法とスキルを同義であると考えているのであれば、この場合のスキルはhow toという解釈になる。このことから、方法 (method) と技法 (technique) の概念をより明確に整理するには“skill”との関連も検討しなければならないことがわかる。

5. ソーシャルワークの技能 (skill) とは何か

(1) ソーシャルワークの“skill”の意味

これまで見てきたように、ソーシャルワークにおいて“skill”は、重要な位置を占めてきたものの、その訳語や本来的な意味や解釈は統一されていない。特に、我が国においては、“skill”を扱った研究はごくわずかであり、未開拓の領域である。

ここで、まず、“skill”の本来的な意味について整理してみたい。“skill”について、ジーニアス英和辞典では「①熟練、腕前、②(特殊な)技能、技術、わざ」とある。オックスフォード英和辞典では、「①物事をうまく行うための能力(ability)、②特別な能力(ability)」とされている。つまり、用語としては、何らかの行為を行うための能力を意味していることがわかる。加えて、その能力がある一定の水準に達した時、それは熟練、わざとして表現されると言える。

では、ソーシャルワークにおいては、どのように定義づけられてきたのであろうか。1958年のNASW「ソーシャルワーク実践の基礎的定義」では、“skill”は技法 (technique) を熟練して用いていく能力とされている。また、前述したようにベームは、知識と価値を融合させた統合表現として“skill”を捉えている (Boehm=1972:10)。シュルマンは、「援助目的を遂行するために用いられる、ワーカーによってなされる行動」と定義している (Shulman1979:4)。我が国において“skill”の先駆的な研究を行った奥田は“skill”を技能と訳し、技能 (skill) を「(ソーシャルワークの) 技法を専門的援助関係を通じて実際に駆使できるよう、ソーシャルワーカーがあらかじめ体得しておくべき、技量、能力、および資質活用能力の総体である」と定義している (奥田1989:53)。また、平塚は、“skill”に関する先行研究を概観したうえで、次のように述べている。すなわち、「ソーシャルワークのスキルとは、クライアントの生活・人生における価値の実現に向けて、ソーシャルワーカーの自己の感覚・直感、生活・人生における経験、教育・訓練による学習経験・専門職としての実践経験などの経験知 (実践知) を呼び覚まし、科学知識体系を選択的・効果的・創造的に用いることのできる実践能力の総体 (コンピテンス) を通して具現される熟練した技 (わざ) をいう。」さらに、それらのコンピテンスはソーシャルワーカーを通して熟練した統合的一体的技術表現として具体的な援助行為に転換されると論じている (平塚2004:10-11)。これらの先行研究から、“skill”とは、方法 (method)、さらにはその下位概念である技法 (technique) を具体的な行為として展開させるための能力であるといえる。この“skill”には、実践によって得られた経験知も反映される。(図1)

(2) ソーシャルワークの“skill”と技術の関係

ソーシャルワークにおいて“skill”は「技術」と訳される場合があることは先に見たとおりである。英和辞典には、“skill”の訳語として「技能」、「技術」のどちらも存在するが、安井のようにあえて「技術」という言葉を用いている者もいる。また、研究者によっては、「技術」を“art”の訳語として用いていることもあり、「技術」の本来的な意味の理解なしに、これらの概念を整理していくことは困難であると思われる。よって、まず、「技術」がどのような意味をもつ概念

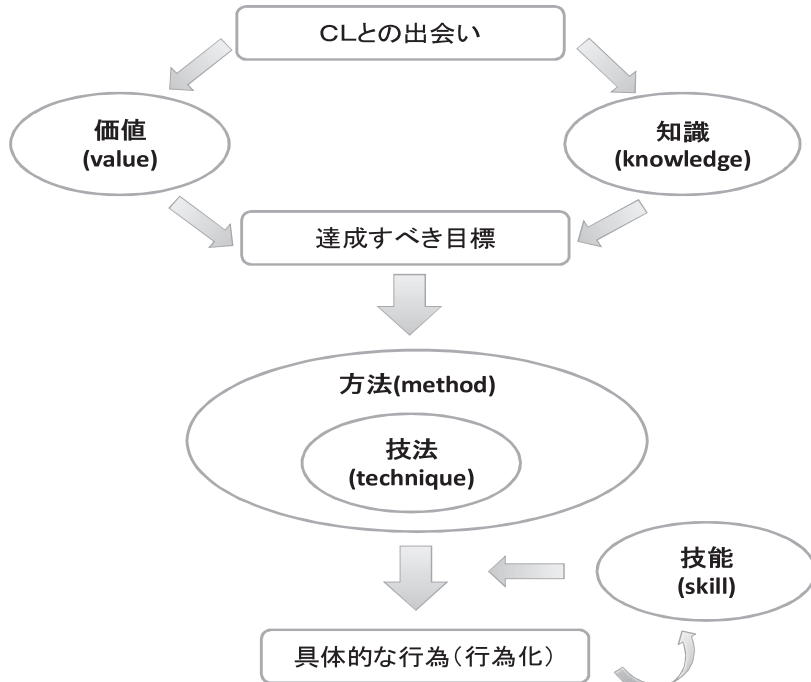


図1 方法 (method)、技法 (technique)、技能 (skill) の関連性

なのかを理解するため、科学史における「技術」の概念の歴史を概観することにしたい。

宗像によれば、技術の語源はギリシア語の「テクネ (Techne)」であり、本来の自然と人為的に変形された自然を区別するため、また、思索的、観念的な「学問」としての人間活動と、物的な自然と関与する人間活動を区別するために用いられたという。さらに、その意味するところは芸術と技術を分離することのできない「技芸」を指すものであったと述べている(宗像1989: 30-31)。つまり、技術はもともと他者には伝達されないその人個人のワザ、すなわち「属人的な技芸 (Techne/Kunst/art)」としての側面と、他者も修得しうる「客観的な技芸」としての側面を合わせ持ち、両者が未分化なまま混在していたということが出来る。時代の変化とともに、技術は徐々に属人的な能力としての意味合いと伝承可能な客観的なものとの意味合いとに分けて捉えられるようになり、現代では、主観的側面である属人的な能力、知識を「技能」、客体的な側面を「方法」「技法」としての技術、すなわちテクニクとして捉え、両者は明確に区別されるに至っている。この場合の「属人的な能力、知識としての『技能』」は、単なる個人のワザである「属人的な技芸 (Techne/Kunst/art)」としての技術とは異なり、客体的な技術を前提としたものであるという。つまり、両者は相反するものではなく、技能 (skill) と技術 (technique) は互いに規定しあい、媒介するものであるとされている(芝田1993: 246, 256)。これらのことから、「技術」の概念には芸術 (art) と技法 (technique) のどちらの意味合いも含まれるため、“art”を「技術」と訳すことは間違いではないと考えられる。しかしながら、「技術」には属人的な能力と客体的意味のどちらも備わっているとすれば、「art=技術」との理解は、技術の一側面をあらわしたに過ぎず、技術の全体性を捉えているとは言いがたい。

これらのことをふまえて、ソーシャルワークにおける“skill”と技術との関係を考えてみたい。このことに関して、平塚は「ソーシャルワークの理論は知識化された技術を含む科学知識を意図的に適用するという技術理論を特徴とする。他面において、ソーシャルワークは、行為主体の構

想力や人間主体を媒介する行為の形態が重視されるアートとしての技術理論をも特徴としてきた」としたうえで、「スキルはその2つの側面に位置する」と指摘する(平塚2004:10)。ここでいう「知識化された技術」とは、他者へ伝達可能な客体的技術であり、知識としての「方法(method)」「技法(technique)」であると考えられる。これらの科学知識を実際に展開するためには、状況に応じて必要とされる科学知識を選択、判断し、適用していくことが求められる。平塚によれば、この部分の“skill”は歴史的に「テクニカル・スキル(技法的技能)」と呼ばれてきたという。また、2つめの側面である「アートとしての技術」とは、すなわち属人的技術のことであり、この側面に位置する“skill”は「アーティストック・スキル(技芸的スキル)」と称される。この“skill”は、科学知識の活用だけでなく、個々のソーシャルワーカーの経験知も活かされるという(平塚2004:10-15)。ソーシャルワークにおいて勘や経験に頼った実践ではなく、科学的な実践を展開することの重要性が叫ばれて久しいが、これは勘や経験自体を否定するものではなく、個人の勘や経験もアーティストック・スキルを構成する重要な要素であるということである。したがって、ソーシャルワークにおける「技術」は、“art”、“technique”、“skill”の総称として理解することができる。このような整理に従うとすれば、「技法(スキル)」という表記の場合には、科学知識としてのテクニカル・スキルのみを意味していると捉えることができるであろう。さらに、“skill”を2つの側面を合わせ持つ統合体として理解するのであれば、テクニカル・スキルのみが強調されないようにあえて「技術」という訳語を当て、“art”としての側面も含めるといことはごく自然なことであると考えられる。我が国において“skill”は「技能」と訳されることが多いことは先に述べたが、「技能」の辞書的な意味が「技芸を行ううでまえ。技量。」であることをふまえると、アーティストック・スキルの側面が強いように誤解されかねない。したがって、“skill”の本来的な意味内容を明確にするためには、「技能」という訳語を使わずに、あえて「スキル」とカタカナで表記する方が良いのではないだろうか。もし、我が国において“skill”を「スキル」と表すことが共通認識となれば、訳語の混乱のいくつかを解消することができるであろう。「たかが訳語」と思われるかもしれないが、ただでさえ分かりにくいソーシャルワークをひとつの専門職として他分野と同じような地位に引き上げるためには、このように絡まりあっている糸を少しずつほどいていく作業が必要不可欠なのである。

6. ソーシャルワークの体系化に向けて

これまでソーシャルワークにおける「方法(method)」、「技法(technique)」、「技能(skill)」の概念整理を行うとともに、「技術」という概念の意味を探ってきた。これらはソーシャルワークの文献においても、また、ソーシャルワークの実践現場においても日常的に使用される用語であるが、果たしてどれだけの人々がこれらの用語の意味や違いを十分に理解し、意図的に使い分けてきたであろうか。いずれもソーシャルワークを構成する重要な要素であることは誰も疑わないであろうが、それらがどのように関連しているのかということは意外にも明確にはされていない。方法の統合化以降、方法のみを強調することに対する反省的視点が得られたとはいえ、ナラティブ・アプローチやソリューション・フォーカスト・アプローチなど次々に新しい方法論が紹介され、実践現場では目新しい方法論に傾倒する傾向も否定できない。ソーシャルワーク教育においては、多様な方法を的確に使い分けることのできるジェネラリスト・ソーシャルワーカーの養成が行われているが、一方で、実践現場では方法を意識的に使い分けている人はそれほど多くはないのが現状である。つまり、実践現場のソーシャルワーカーには方法の統合化の意識は十分に浸透しているとは言えないということである。その意味でも、我々が実践しているソーシャル

ワークというものがどのような体系のもとに成り立っているのか、また、ソーシャルワークが科学的な専門職の実践となり得るとはどういうことなのか、ということを一歩体系的に理解する必要がある。

周知のとおり、ソーシャルワークの基本的要素のうち価値 (value)、知識 (knowledge) は、ソーシャルワークを実践するための根幹となるものである。価値がなければ、その実践において目指すべき方向を明確にすることはできないし、ソーシャルワーカーとしての視点や対象認識、さらにはソーシャルワーカーとしての専門的判断もできない。しかし、実践における目指すべき方向がはっきりしたとしても、その方向に導くために何をどうすればよいのか、つまり、「方法 (method)」や「技法 (technique)」を知識として持ち合わせていなければ、プランニングをすることすらできない。だが、知識として「方法 (method)」や「技法 (technique)」を知っているだけでは、ソーシャルワークを実践することはできない。ソーシャルワークにおいては、価値や知識をもとに導き出された「方法 (method)」や「技法 (technique)」をソーシャルワーカーが具体的な行為として展開するためには「技能 (skill)」が必要である。その意味で、「技能 (skill)」とはソーシャルワーカーの実践をソーシャルワークたらしめるものであり、いくら価値 (value) と知識 (knowledge) があっても「技能 (skill)」がなければソーシャルワークは成り立たないと言えるであろう。つまり、価値 (value) や知識 (knowledge) から導き出された「方法 (method)」や「技法 (technique)」などのテクニカル・スキルは、ソーシャルワーカーを通してアーティスティック・スキルへと変換され、実際の行為へ移されるのである。「技能 (skill)」がテクニカル・スキルとアーティスティック・スキルの2つの側面から成り立っていることを考えると、ソーシャルワークを体系的に理解するには、ソーシャルワーク実践からのフィードバックは、アーティスティック・スキルを形づくる重要な要素である。また、ソーシャルワーク実践からのフィードバックが個人の経験知としてだけでなく、様々な人々の知の集積として理論化さ

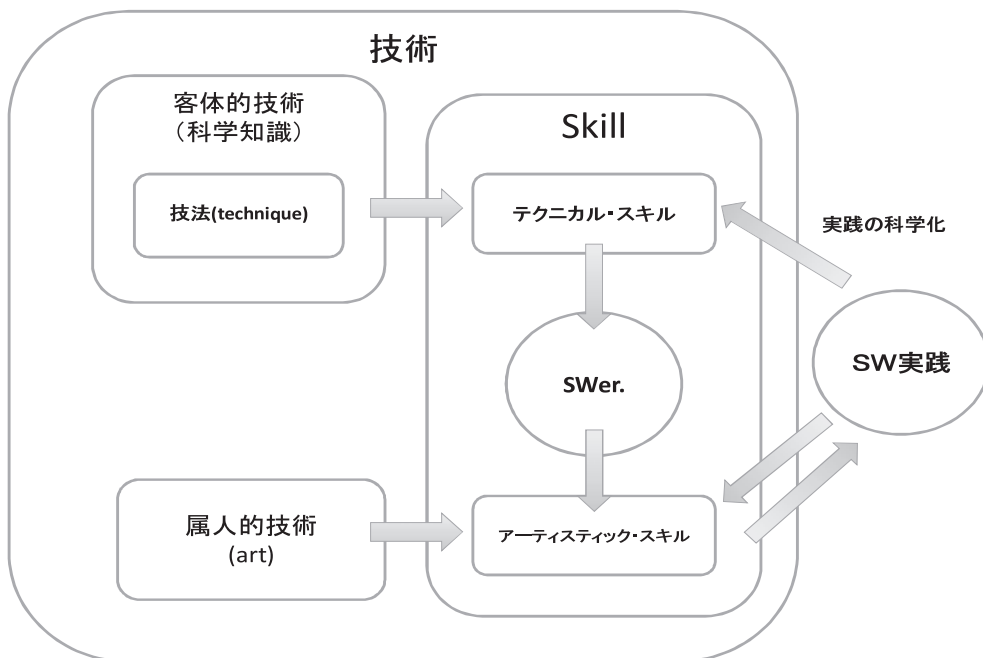


図2 ソーシャルワークにおける技術と“art”“technique”“skill”の関連性

れるならば、それは、個人の経験知というレベルを脱し、他者に伝達され得るテクニカル・スキルとなる。これが岡本の主張する「実践の科学化」(岡本2004:196-197)のひとつであり、ソーシャルワークの専門性の確立のために今後ソーシャルワークが最も力を入れていかねばならない部分である。このように、ソーシャルワークにおいては、理論と実践は相互に規定しあっているのである。(図2)

7. おわりに

ソーシャルワークはこれまで隣接諸科学の様々な知見をもとに発展してきた。このような背景から「借り物の科学」と批判的に捉えられることもあるが、今なおソーシャルワークという分野が存在するという事は、裏を返せば、この世の中で必要とされているからに他ならない。たとえ、隣接諸科学を応用してきたとしても、実際にソーシャルワーカーは他の専門職とは異なる視点・対象認識のもと、ソーシャルワーカーとしての専門的な判断をくだし、問題解決を図っている。つまり、ソーシャルワーク実践の場には、他の専門分野にはない「ソーシャルワークらしさ」が数多く存在しているということである。しかしながら、残念なことに、これらの「ソーシャルワークらしさ」は日々の実践の中に埋もれ、なかなか言語化されることがない。ソーシャルワークが隣接諸科学とは異なる独自の専門領域として確立するためには、ソーシャルワーカーの実践で得た知恵を言語化していくことが不可欠である。そこで、実践の科学化に向けて重要な役割を果たすのが“skill”である。アーティスティック・スキルを単に個人に帰属するものとしてではなく、アーティスティック・スキルから「ソーシャルワークらしさ」を導き出し、テクニカル・スキルへと発展させていくような理論化を目指した試みが必要であろう。ソーシャルワークが専門職の実践であるために、今後も“skill”を基軸とした研究を行っていきたい。

文献

- ・ Armando T. Morales, Bradford W. Sheafor (1995) *Social Work-a profession of many faces*, Allyn & Bacon.
- ・ Bartlett, H.M (1970) *The Common Base of Social Work Practice*, National Association of Social Workers. (=1978, 小松源助訳『社会福祉実践の共通基盤』ミネルヴァ書房.)
- ・ Bisno, H (1969) *A Theoretical Framework for Teaching Social Work Methods and Skills*, Journal of Education for Social Work, Vol. 5, No. 1, 5-17. (=1978, P.E. ワインバーガー編/小松源助訳「ソーシャルワークの方法と技能を教育していくための理論的枠組」『現代アメリカ社会福祉』ミネルヴァ書房, 201-218.)
- ・ Boehm, W.W. (1958) *The Nature of Social Work Practice*, Social Work, Vol. 3, No. 2 (=1972, P.E. ワインバーガー編/小松源助訳『社会福祉論の展望』ミネルヴァ書房, 10-18.
- ・ Buyrym, Z.T. (1970) *The Nature of Social Work*, The Macmillan Press (=1986, 川田誉音訳『ソーシャルワークとは何か-その本質と機能』川島書店.)
- ・ 平塚良子 (2004) 「ソーシャルワークにおけるスキルの意味」岡本民夫・平塚良子編著『ソーシャルワークの技能-その概念と実践』ミネルヴァ書房, 1-20.
- ・ 北川清一 (2006) 『ソーシャルワーク実践と面接技法-内省的思考の方法』相川書房.
- ・ 小松源助 (1983) 「『社会福祉方法原論』序説」『社会福祉学』24 (2).
- ・ Louise C. Johnson, Stephen J. Yanca (2001) *Social Work Practice: A Generalist Approach, 7th ed.* Allyn & Bacon. (=2004, 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房.)
- ・ 宗像正幸 (1989) 「技術の意義の変遷と技術の基本的対象構造について」『国民経済雑誌』159 (4).
- ・ 岡本民夫 (1973) 『ケースワーク研究』ミネルヴァ書房.
- ・ 岡本民夫 (2004) 「ソーシャルワークにおけるスキル研究課題」岡本民夫・平塚良子編著『ソーシャルワークの

- 技能－その概念と実践』ミネルヴァ書房，194－199.
- ・岡村重夫（1976）「方法論の統合化の意義」『社会福祉研究』19, 40－45.
 - ・岡村重夫（1983）『社会福祉原論』全国社会福祉協議会.
 - ・奥田いさよ（1989）「ソーシャルワークの技能－ソーシャルワークにおける援助技術の体系化をめざして」『ソーシャルワーク研究』15（1）.
 - ・太田義弘・中村佐織・石倉宏和（2005）『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング－利用者参加へのコンピュータ支援』中央法規.
 - ・Shulman,L.,（1979）*The Skills of Helping : Individuals and Groups*, F.E. Peacock Publishers Inc.
 - ・安井理夫（2009）『実存的・科学的ソーシャルワーク－エコシステム構想にもとづく支援技術』明石書店.